

# 住居建築にみる地域社会の様態と自然環境の変容

## —ペンバ島を事例に—

平成 23 年入学

派遣先国：タンザニア連合共和国

角田 さら麻

キーワード：家屋建築、環境利用、マングローブ、住民組織

### 対象とする問題の概要

インド洋に浮かぶザンジバル諸島には、10 世紀以前からたびたびアラブ人たちが渡来して外国の文化を伝えてきた。アラブ人がザンジバルに再現したイスラーム世界は、ザンジバルの文化の形成に多大な影響を及ぼし、それはのちにスワヒリ文化として花開くことになる。建築様式もその 1 つで、地元の資源を駆使してイスラーム建築を創造的に模造する過程で、特有のスワヒリ建築が生み出されていった。ザンジバル諸島の 1 つであるペンバ島では、農村の民家がその原初的な姿を今に伝えている。しかし、天然の資源に依存してきたスワヒリ建築は、近年、環境が劣化するのにもなって建築資材が不足するようになっていて、人々はそれへの対処を迫られる。

### 研究目的

本研究では、ペンバ島の限りある天然資源を人々がどのように利用・管理しながら、社会や生態環境の変化に対処しようとしているのかを、一般家屋（写真 1）の分析からあきらかにする。調査では、対象家屋の建設年・増改築歴・世帯構成・建材の変化などについて調べるとともに、村落の空間的構造や住居の生活環境を把握する。また、建材については、材質に関する知識や加工の技術を聞き取りながら、建材を恒常的に入手するための環境管理の実態を探る。環境の変化については、役所に保管されている統計資料や、地図・航空写真などの資料をもとに調査地を取り巻く人と自然の動態を捉える。



写真 1. G 地区内の一般的住居の外観

### フィールド・ワークから得られた知見について

調査地はこれまで研究してきたペンバ島北西部の G 地区（人口約 3,000 人）で、その 1 つの村に住み込みながら調査した。G 地区内から選抜した 3 村の全 151 の家屋<sup>1</sup>を対象に、その建築歴・家屋の構造・建材を調べた。また、現在の家主が以前住んでいた家屋についても同じ事項とその位置を聞き取り、村人の動きと家屋の構造・建材の変化を捉えた。

木造土壁にセメント塗装された外壁（土壁がむきだしのままや、漆喰塗装などの場合もある）とヤシ葺、中央に設けられた観音開きの玄関扉の左右にはセメントづくりの現地語で *baraza* とよばれる腰かけがある。この住居は 2013 年 11 月に完成した新築で、他の多くの新築と同様に住居の玄関扉の木材にはジャックフルーツが使われている。

家屋の平面構造には大きな変化は見られなかったが、建築資材の主となる柱はマングローブからチョウジに、壁と床の塗装は漆喰からセメントに変わりつつある。個人の居住地が村内で大きく移動することはなく、新築する際には、元の家跡地、ないしはそのすぐ近くに家を建て、結婚などによって独立した世帯も母屋の周囲に新居を構える傾向がある。したがって、村内では親族、あるいは同一のクランが集まって小集落を形成することになる。家の敷地の所有権は基本的に世帯主に帰属するが、小集落の土地は“ワクフ(wakfu)”と呼ばれていて、それぞれのクランがワクフを所有・管理している。ワクフの範囲は果樹などを目印としてほぼ固定しており、外延的に拡大することはない。新しい家屋はワクフ内に建設されるため、家屋ごとの間隔が数メートルしかない密集した状態になっているところも多い。家屋の過密化はG地区内の全村で見られる傾向であるが、ワクフの境界線をめぐるクラン間の対立もたびたびおこるようになっている。



写真 2. 家屋の中庭でくつろぐ叔母と姪

中庭をもつ家の平面構造は基本的に変わっていないが、床にはセメントが使われるようになっている。

G地区の限りある天然資源のなかで、地域内に生えている木々は家の建築に欠かせない。とくに海岸線を縁取るマングローブ林は島内で建材利用されるだけでなく、19世紀にはアラブ諸国にも大量に輸出されていて、古くから島内の需要と現金収入源を担ってきた。調査地でも、かつてはマングローブをタンザニア本土に輸出していた。マングローブ林は海岸の環境を保全する植生として今は伐採が制限されているが、耐久性に優れた建材としてその需要は依然として高い。1949年、1970年と2005年の航空写真からも、G地区のマングローブ林が減少傾向にあるのが分かる(写真3)。木材が不足すれば、建設だけでなく、日々の調理用燃料の薪も不足することになるため、マングローブ林や他の植生の荒廃はたびたび問題視されてきた。



写真 3. 干潮のときのマングローブ

村人によると、かつては中央に孤立しているヒルギダマシ *Avicennia marina* もマングローブ林のなかに埋もれていたという。(2013年10月21日撮影)

樹木の減少に対処するため、数年前、村人が主体的に3つの住民グループを結成し、樹木の育苗や植林を始めた(写真4、写真5)。これらのグループは、建材に使用するための樹種の他に、屋敷林につかう果樹や、重要な現金収入源であるチョウジの苗床の管理と植林などを積極的に進めている。

社会的変容をもたらす生態環境の変化は、人びと暮らす家屋や土地保有など、生活のさまざまな局面

に影響を与えている。セメントが普及してきたとはいえ、村ではまだ高価な資材であり、誰もがコンクリートの家を建てられるわけではなく、木材がなければ家は建たない状況に変わりはない。そこで彼らは樹木利用を制限するのではなく、自ら樹木を育苗・植林して植生を回復・管理することで、ペンバの風土に根ざした居住様式を堅持しようとしているのである。



写真4. マングローブの植林

周辺の浜から採取できるオオバヒルギ（ヤエヤマヒルギ）  
*Rhizophora mucronata* の種子を中心に植林していた。  
(2014年3月30日撮影)



写真5. 住民グループによるチョウジなどの育苗

### 今後の展開・反省

今回の調査では、家屋建築に必要な建材と土地に焦点を当て、生活を取り巻く生態環境に関するデータを中心に収集した。今後はこれらのデータをもとに、人びとが自分たちの居住空間をどのように認識・利用し、またそれは彼らの文化とどのように関連しているのかを調査していく。また、生態環境への彼らの認識についても調査し、環境の修復と管理に取り組もうとした経緯や実態、さらにはその成果についてもあきらかにしていくつもりである。

---

i 無人の家屋、現在建設中の家屋も含む。